郷土史探訪

伝　大友軍道

―山中に取り残された道―

義沖　光

はじめに

江戸時代に府内街道と呼ばれた道があり、浜脇村から赤野部落、赤松村を経て銭瓶峠を越え府内に伸びていた。有名な銭瓶峠騒動の舞台である銭瓶峠は高崎山の裏手に位置するが、銭瓶峠騒動よりもずうっと以前の大友時代の遺物である「大友軍道」と言い伝えられている道路跡とおぼしきものが赤野地区山中（地元ではこやまじ山と言う）にある（現在の行政町名では別府市山家町十組）。

この赤野地区には大友時代に大友氏の枝城があったが、現在その場所は特定されていない。

ここの枝城は、建武の中興に功績のあった楠木正成の弟、正氏の子孫が豊後浜脇赤野に移住して大友十代親世（ちかよ）に仕え、雄城（おぎ）氏を名乗り代々城主としてきたと云われている。この赤野城の側を大友軍道が通っていたのであろうか。

「伝大友軍道」が本物であると云う史料はない。また真実ではないと云う証拠も無い。有るのは「ここに大友軍道があった」と伝承されてきた事実だけである。代々言い伝えられてきた重みがここにはある。その重みを頼りにレポートしようと思う。

この大友軍道は府内街道（今は使われておらず森林化している。現在の道は昭和九年完成の新道。）のすぐ近くに位置しているが、府内街道とは縁が切れた位置にある。とはいえ高崎山城のすぐ下に位置しており、ここに軍道があったとしても全く不自然ではない位置関係にある。二階崩れの際に義鎮（よしげ）が、薩摩島津氏の府内侵攻の際には義統（よしむね）が、この道を走ったであろうと想像が膨らむのである。

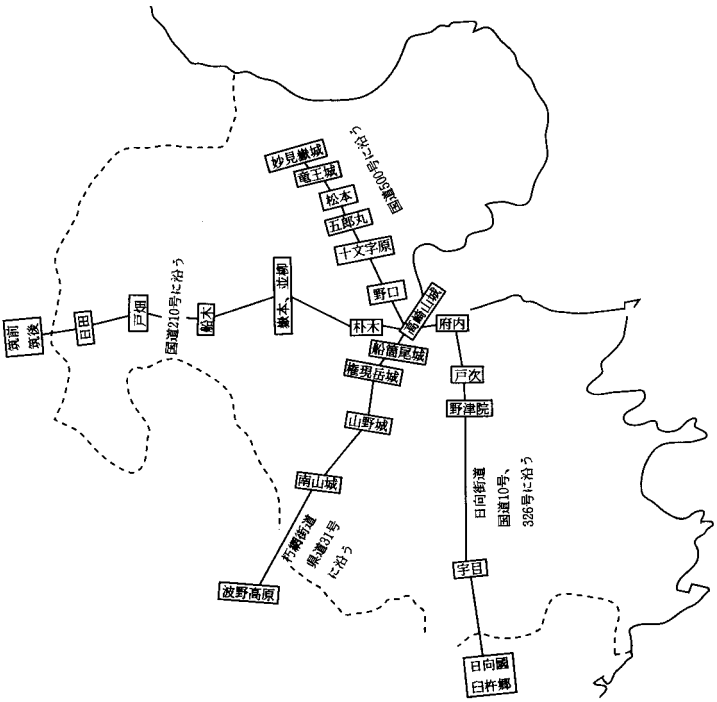
大友軍道とは

大友軍道については昭和八年編纂の『別府市誌』にかなり詳しく記載されている。少し長くなるが引用してみよう。

「宗麟時代の道路は蓋し概ね軍道なり。而して盛んに利用されたるもの凡そ数線あり。其の一は府内より戸次、野津院、宇目郷酒利、梓峠より日向国臼杵郡に出で縣（今の延岡）無鹿に達するもの即ち日向街道なり。其の二は則ち府内若は高崎山城より船箇尾城（大分郡阿南村大津留）権現岳城（大分郡東庄内村龍原）を連繋して、大友氏の重臣朽網（くたみ）氏の鎮せる山野城（直入郡長湯村字下）に至り、更に伸びて志賀氏の南山城（直入郡白丹村大字白丹）と連絡し、遂に豊肥國境波野高原に至る。所謂朽網街道とす。

其の三は則ち府内若は高崎山城より、高崎（大分郡石城川村）朴木（同郡由布川村）嶽本、並柳（共に速見郡北由布村）船木（玖珠郡東飯田村）戸畑（玖珠郡北山田村）及び日田を経て、筑後筑前に出づるもの是なり。其の四は府内より浜脇別府を経て、野口より鉄輪街道に出で、十文字原より五郎丸（宇佐郡津房村）松本（同郡同村）龍王城を歴て香下妙見嶽城に連繋せるもの是なり。而してこの第四軍道は其の端を野口に発して、別府との交渉関係頗る密接なるものあり。当時の野口は、一面に於て両筑より、日田玖珠並びに由布院を経て別府、府内に至る官道幹線の衝に当れるのみならず、又里屋、古市より至る豊前海岸街道を承けて、軍旅人馬の去来殆んど虚日なく、京洛の兵乱を避くる月卿雲客、乃至観光漫遊の他邦人が、府内の繁華にあこがれて麕（きんし）至雑沓し、野口の街

図1　四大大友軍道配置概略図



巷転(うた)た肩摩轂撃(こくげき)の熱閙(ねっとう)境を現出したるや略々想ふべきなり。」以下略。

上記別府市史に記載されている土地名や城名を現在の地図上に転記すれば、おおよそ現在の国道や県道に沿っていることが判る（図1）。

大友氏以前からの戦国時代の道路はすべて兵の移動に利用されていた訳であるから、すべての道は軍道と言える訳であるが別府市史記載の軍道はその主たるもの、メインロードと云うべきものであろう。なにしろ大友氏時代とそれ以前の戦国時代からの中世城館は大分県内には五六九ヶ所在ったといわれている。県内網目のごとき状態で道があったと想定できる。

（参考：別府市には中世城館は六ヶ所あったといわれる。貴船城（鉄輪）、赤野城（浜脇）、大友館(やかた)（浜脇）、鍋山(なべやま)要害（浜脇）、ふがい城（野田）、立石城（立石）。）

伝承の大友軍道の調査

東別府駅から赤松村（現在は赤松町）へ続く道を十分位歩くと赤野地区（現在は山家十組）に着く。この赤野地区の西側に小高い山がある。地元では「こやまじ山」と云う。この山の麓には瓜生島の赤地蔵伝説の地蔵と地元が云っているお地蔵様を祀っている社（伝説を確認出来るものは見つからぬ）と江戸時代の府内街道の道の一部が残されている。「伝承の大友軍道」はこの山の中腹にある。

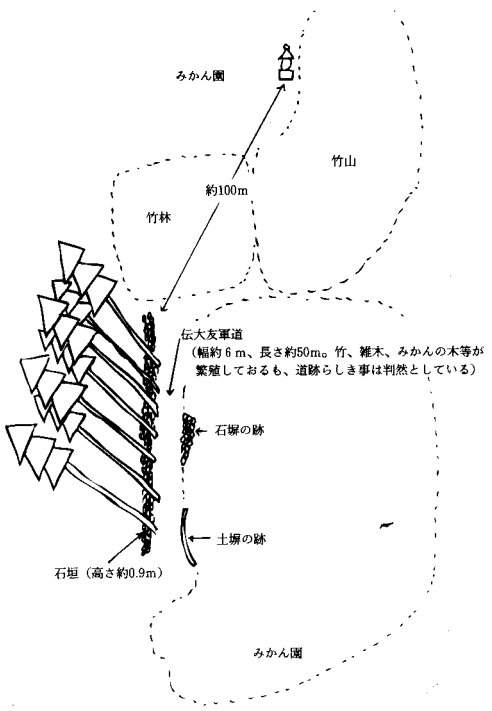
獣道のような道を昇っていくと、みかん園と栗林がありその側に大友軍道と呼ばれる道が横たわっている。道の長さは南北凡そ五〇m、幅約六mで平坦な道の跡である。道の東側は杉並木で幹周りは一m～一・七m、西側には住居跡と思われる石積と土壁が今まさに消えようとしている。道の平坦な所には雑木や竹が繁茂して、この道もまさに消えようとしている。

道の南の延長線約一〇〇mの所に苔むした五輪塔がある。五輪塔はあと一基この近くにあるとのことであるが見つけ出せなかった。五輪塔の側を軍道が伸びていたのかも知れない（図2）。石積の石は野面石ではなく角石である。文献によると角石の粗加工が行われるようになったのは天正年間であるが、当該石積がそんなに古いものでない事は石の風化状態から推定できる。

ただし道は土地所有権に関わることや、場所が経済価値の乏しい山中で経済活動が発生しにくい土地柄である事などが

幸いして昔のまま保存された可能性があるものの、この道の延長が山を降るであろう所には二m位の幅を持つ道跡らしきものがあるが幅六mもの道跡はない。従って道を形作る石積の風化状態等も考慮すれば道幅は近年拡幅された可能性が強い。

図2　伝大友軍道（平面略図）



まとめ

通常、道路の歴史は人の歩む〈みち〉から始まる。西欧諸国に於いては〈みち〉はその後乗合馬車さらには自動車の走る道路に発達するが、日本では歩く〈みち〉からいきなり自動車の道へと変化したという特殊性があり、山を貫き長い橋を渡る新しい道つまり現近代の高速道路に代表される道路建設がそのことを象徴している。

日本は近代化を急いだ。利用価値を無くしたものは躊躇なく捨て去られた。江戸時代からの道を拡幅し舗装して国道や県道或いは市道として現在も生きている道が残っているものの、例えば一里塚などの道程なども含め多くの道が消え去り、又は脇に押しやられた。

司馬遼太郎の「街道をゆく」のなかに『律令のころ豊後森町に玖珠郡（くすおり）の郡衛があった。国道二一〇号線に車を止めて今はいい道になっているが、古街道は多分この道に平行して玖珠川のむこう岸を通っている旧道がそうに違いない』というくだりがある。歩く〈みち〉が車の〈みち〉へ一気に取って代わられた例であろう。

同じく「街道をゆく」で王朝時代の豊後日田街道が略図ながら図示されている。この略図によると豊後日田街道は国東半島を一周して（国道二一三号に沿う）日出、別府をへて由布院にいたり玖珠から日田に達する道として記されている。この道は元禄七年貝原益軒が描画した道に沿っているように思われる。

日本の長い歴史にあって、政権の中枢地域においては軍事経済上の必要から系統的に道路整備が行われた。

古代では大化の改新以後東海道を含む五畿七道が整備され、大宝律令で道路の等級付けがなされ（たとえば山陽道は大路、東海道は中路に格付け）、鎌倉時代には東海道に駅法を定めて飛脚や早馬を設置し、江戸時代には関東五街道が整備されまた宿場町も整備された。しかし政権から遠い地方では特筆されるような道作りの記録はなかなか見つけ難い。

大友軍道についてもいかなる歴史を経ているのか記録が見つからない。表題の伝大友軍道も記録は見つからぬが観察点を総合すれば、この道は近年において加工された部分がかなり有ると推定出来るものの、伝承の大友軍道が根本にあった可能性は否定出来ないと思われるのである。

大友軍道について御存知の方が居られましたらお教え下さい。

ついでながら、冒頭に記したが楠木正成敗死後の明徳四年（一三九三、正成死後二五年目）に正成の次弟、正氏（長男正成と末弟の正季の記述は詳しいが正氏のことについてはほとんど記述がない。「系図纂要」橘氏系図では〈於湊川正成一所討死三十九〉とあり戦死した事になっている）の子孫正業が赤野に移住し、その子孫は赤野城主までに出世したが、大友家滅亡後は野に下りて赤野地区近辺で百姓をしながら世をしのんだといわれ、今でも赤野地区の人々の中には楠木一族の子孫であることを誇りにし、このことを後世に伝えたいと願っている家系がある。

また糸永姓の始祖は赤野城主雄城氏一統から出たと云われている。

参考資料

『別府市誌』昭和八年版
「大分県文化財調査報告書第一六一」（大分県教育委員会）
是永　勉『別府今昔』
「楠木氏の系図」（『尊卑分脈』橘氏系図、『群書類従』楠木氏系図、「系図纂要」橘氏系図より）
司馬遼太郎『街道をゆく』（講談社）
『大百科事典』（講談社）